

中にも「怖くて家の中に入れない」と、あえて車内で寝泊りする人も。そのため、肺塞栓症（通称「エコノミークラス症候群」）で亡くなる被災者も発生した。

さらに、被災後のストレスや疲労による高齢者の死亡が跡を絶たなかったことも、新潟県中越地震の大きな特徴である。その点では、死亡者の9割が建物の倒壊や火災によるものだった阪神・淡路大震災とは大きく異なっていたといえるだろう。被災地域となった小千谷市など7市町村は、いずれも人口に占める65歳以上の割合が20%を超えており、全村が一時孤立した山古志村の場合、実に40%が65歳以上の高齢者。若年層と比べ高齢者は新しい環境への適応が難しく、心の傷を受けやすかったり、回復に時間がかかったりという特徴があるため、長期化した避難生活が高齢者の心身に大きな

負担をかけ、死者を増大させてしまったのである。

新潟県経済にも大打撃 観光産業に深刻な風評被害

新潟県中越地震はまた、新潟県経済にも大きな打撃を与えている。被災地域はもちろんのこと、直接被害を受けなかった佐渡島や上越・下越地方も風評被害に苦しんだ。新幹線、高速道路などの寸断で被災地域の温泉など観光地で予約キャンセルが相次いだ。県外では「新潟県全体が危ない」といった風評が流れ、被害もなく交通アクセスが問題ない地域でも予約取り消しが大量に発生し、主に観光業が大打撃を受けた。

新潟県旅館組合に加盟する約870軒を対象

とした調査によると、10月23日の地震発生から12月15日までの宿泊キャンセル数は約42万人となり、被害額は約80億円に達した。新潟県では、こうした風評を払しょくするため、新潟県観光復興会議の設置など官民が一体となって観光復興に取り組んだ。

新潟県中越地震においては、ピーク時には約600箇所の施設で10万人以上の住民が避難所生活を余儀なくされた。しかし、全国からの支援や自治体の復興対策、被災者の努力などの甲斐もあって、被災した住宅の修繕や仮設住宅の整備などが着々と進み、地震発生から2カ月以内に、被災者は続々と自宅へ戻るか、あるいは仮設住宅への入居を済ませた。長岡市と小千谷市の学校体育館などで、最後まで避難生活を続けていた被災者もやがて全員が退去、12月22日には県内すべての避難所が閉鎖された。

【インタビュー】

INTERVIEW



新潟県 山古志村長
長島忠美氏

地震が生活のすべてを奪い去った

～全村避難から完全復興を目指す～

新潟中越地震で甚大な被害を受けた山古志村。

「日本のふるさと」と呼びたくなるような美しい山間の村は、

巨大なエネルギーに一瞬にして破壊された。全村民が村から離れざるを得なくなったが、

今、再生への道を着実に歩みは始めている。

被災時の様子、復旧への展望などについて、山古志村長の長島忠美氏に伺った。

●被災から全村民避難までの様子を教えてください。

地震の時、私は自宅にいました。家の中は滅茶苦茶になりましたが、幸い家族にケガはなく、無事を確認するとすぐに役場で事態を把握しようと出かけました。ところが、役場への道が寸断されただけでなく、外部との連絡がまったく取れず、なかなか状況が把握できなかったのです。防災無線が機能しませんし、固定電話も携帯電話も通じません。

結局、役場に辿り着けないまま、中学校を災害対策本部にして、翌朝から県庁、警察、自衛隊などと連絡をとりながら指示をしたわけです。24日の昼過ぎには避難勧告を出しました。暗くなると自衛隊がヘリを飛ばせないというのを無理にお願いし、その日はヘリコプターが8回も往復、250人ほどを救出してもらいました。翌日朝には避難指示を出して救出を続け、25時間ほどか

かって、全員を避難させることができました。

●今度の地震は山古志村にとってどのような災害とらえていますか。

生活基盤だけでなく、歴史や文化まで奪われる災害です。山古志村は14の集落から構成され、それぞれが独自の歴史や文化を持っていますが、それが寸断されてしまったからです。

地震で生活の根幹を一瞬にして失う恐ろしさを痛感しました。

●復旧についてはどのようにお考えですか。

元の100に戻すというより、新たに200を目指すくらいのつもりで進めたいですね。そうしてはじめて、若者から高齢者まで全員が帰り、今後10年かかるかも知れませんが、私たちの後子どもや孫が引き継いで

村を再生していけると思います。

また、私は「自分たちの財産は自分たちで守る」という緊張感が大切だと思うので、村民に雪降りし隊を結成させるなどしています。

●この経験からアドバイスできることは何ですか。

防災無線を個別に破壊されない所に設置するなど情報通信の確保、普段からコミュニティが機能する地域づくりを心がけることですね。反省点としては、これほど多くのボランティアに来ていただけるとは想像していなかったので、受け入れ体制が十分でなかったことです。現在は、仕事を交通整理する部門を設けることで、非常にうまく機能しています。

皆さんの暖かい気持ちに励まされながら、村民全員で村に帰れるよう力を尽くしたいと思っています。